

令和6年度 成績概要書

課題コード（研究区分）： 4102-426500 （道受託研究）

1. 研究課題名と成果の要約

- 1) 研究成果名：令和6年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫
（研究課題名：病害虫発生予察調査）
- 2) キーワード：病害虫発生予察、注意すべき病害虫、新発生病害虫
- 3) 成果の要約：令和6年度に実施した病害虫発生予察調査から、多発傾向にあった病害虫として11病害虫を示した。また、令和7年度に特に注意を要する病害虫として3病害虫について防除指導上の注意を喚起する。さらに、令和6年度に新たに発生を認めた病害虫として12病害虫（病害4、害虫8）を示した。

2. 研究機関名

- 1) 代表機関・部・グループ・役職・担当者名：中央農業試験場・病虫害部・予察診断グループ・研究主幹・西脇由恵
- 2) 共同研究機関（協力機関）：
中央農業試験場・病虫害部・病害虫グループ、上川農業試験場・研究部・生産技術グループ、
道南農業試験場・研究部・作物害虫グループ、十勝農業試験場・研究部・生産技術グループ、
北見農業試験場・研究部・生産技術グループ、花・野菜技術センター・研究部・生産技術グループ
北海道農政部技術普及課、北海道病害虫防除所（全道農業改良普及センター、北海道農業研究センター）
3. 研究期間：令和6年度（2024年度）

4. 研究概要

1) 研究の背景

病害虫の発生はその年の発生状況や気象経過のほかに、前年の発生状況の影響を受ける。効率的な病害虫防除を実施するためにはそれらを踏まえた全道的な情報が求められる。また、道内で未確認の病害虫が突発的に発生するため、迅速な対応が求められる。

2) 研究の目的

全道での病害虫発生状況を新発生病害虫も含めて記録し、これをもとに次年度に注意すべき病害虫を示して防除指導にあたっての注意を喚起する。

5. 研究内容

1) 農作物有害動植物の発生状況（R6年度）

- ・ねらい：農作物有害動植物の発生状況を記録する
- ・試験項目等：19作物・89病害虫の発生状況を調査

2) 突発および新発生病害虫の診断試験および調査（R6年度）

- ・ねらい：道内で新たに発生した病害虫を同定し記録する
- ・試験項目等：発生調査、再現試験、同定試験

6. 研究成果

1) 農作物有害動植物の発生状況

本年度の天候は春季から秋季まで高温に経過し、特に夏季の高温は病害虫の発生に大きく影響した。高温性の病害が多発し、害虫では早発や旺盛な増殖、加害活動が被害を拡大させた。

（1）令和6年に多発～やや多発した病害虫

- ア) 水稻：縞葉枯病、アカヒゲホソミドリカスミカメ
- イ) 秋まき小麦：赤さび病、眼紋病
- ウ) 春まき小麦（初冬まき）：ムギキモグリバエ
- エ) 大豆：わい化病、タネバエ
- オ) ばれいしょ：そうか病
- カ) てんさい：褐斑病、ヨトウガ（第2回）
- キ) りんご：腐らん病

（2）令和7年度に特に注意を要する病害虫

（ア）小麦の赤さび病

本年度、これまで発生が比較的少なかった地域でも秋まき小麦の赤さび病が多発し、道央では春まき小麦「春よ恋」でも多発した。近年の本病多発要因として越冬菌量の増加が考えられており、本年の多発から越冬菌量は多くなると推測され、令和7年度の発生に注意が必要である。対策は令和6年指導参考事項

「多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除対策」に基づき発生リスクが高いほ場では、1回目の散布を次葉展開期から止葉期に効果が高く残効の長いインピルフルキサム水和剤Fあるいはフルキサピロキサド水和剤Fで行い、開花始に2回目の散布として赤かび病にも効果的なキャプタン・テブコナゾール水和剤あるいはプロチオコナゾール水和剤Fを用いることで効率的に防除できる。また、これまで発生リスクが高くなかった地域でも前述の防除を検討する必要がある。また、本年度の発生量が多かった地域では病原菌の越冬量が多く、初発が早まることも想定される。本病は散布タイミングが遅れると、十分な防除効果が得られないので、防除適期を失しないようにする。

(イ) トマト・ミニトマトのトマトキバガ

本種は侵入警戒有害動植物で道内では令和5年に初めて飛来が確認され、本年度はフェロモントラップによる調査において全道各地で前年を上回る成虫の誘殺を認め、道内各地のハウス栽培トマトで葉や果実の食害が確認された。特に、前年に本種の発生が認められた地域の越冬ハウスでは育苗期間中から葉の食害が確認された。本種の発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター等に連絡する。発生を拡大させないため、薬剤散布を行うとともに、被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋没するなど適切に処分する。越冬ハウスでは残さやナス科雑草等の寄主植物を除去する。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性の発達を防ぐため系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(ウ) ぶどうの晩腐病

本年度、道内の生食加工用や醸造用ぶどうにおいて収穫直前に本病による果実の腐敗が多発し、一部の地域では収量が大きく減少した。本年度の発生状況から次年度の一次伝染源が多くなることが推測されることから令和7年に発生に注意する必要がある。本病による被害を軽減するためには、第一次伝染源となる結果母枝上の分生子を抑制する休眠期（発芽前）および新梢や果実への感染を防ぐ生育期の防除を実施する事が重要である。道外では生育期の重要な防除時期は落花期、落花10日後頃とされる。降雨が連続する場合には追加散布も必要となり、使用時期に制限がある薬剤も多いことから、本病は薬剤だけで対処する事が困難である。巻きひげや前年果梗の切り残し部分などの除去、被覆栽培や果実への早めの袋かけ、笠かけ、袋かけはしっかりと口を留めること、こまめな新梢管理、二番成りの除去、排水対策など耕種的防除が重要となる。

2) 突発および新発生病害虫の診断試験および調査

(1) 新たに発生を認めた病害虫

- ア) 小麦および大麦のクビアカクビホソハムシ（国内新発生）
- イ) 大豆のダイズクロハモグリバエ（新発生）
- ウ) らっかせいのアズキノメイガ（新寄主）
- エ) 大豆、小豆、べにばないんげんのホソヘリカメムシ（新寄主）
- オ) べにばないんげんのマメノメイガ（新寄主）
- カ) 小豆のマイコセントロスポーラ斑点病（新称）
- キ) 小豆の茎腐細菌病（病原菌の同定）
- ク) かんしょのヒルガオハモグリガ（新寄主）
- ケ) ピーマンのガンマキンウワバ（新寄主）
- コ) ねぎの苗立枯病（病原の追加）
- サ) キヌアの苗立枯病（新称）
- シ) せんきゅうのナミハダニ（新寄主）

- 新寄主：道内に分布することが既知である害虫の、新たな作物への加害記録
- 新称：これまで正式な名称（病名、害虫の和名）のなかった新たな病害虫の名称提案
- 国内新発生：これまで国内での発生事例がなかった病害虫
- 新発生：道内での発生事例がなかった病害、道内に分布が確認されていなかった害虫
- 病原菌の同定：未同定だった病原菌の種名の確定
- 病原の追加：既知病害と病徴に違いのない新たな病原の追加

7. 成果の活用策

1) 成果の活用面と留意点

ここに記載した病害虫について、特に今後の発生動向に注意する。また、令和7年度に特に注意を要する病害虫については適切な防除対策を講じる。

2) 残された問題とその対応 なし

8. 研究成果の発表等 なし